

複合動詞後項文法化の日中比較

「V-上げる」と「V-上」を中心に

陳 月吾* 王 育潔**

A Comparative study on Grammaticalization of Post-verb in

Composite Verb between Japanese and Chinese

Taking ‘V-ageru’ and ‘V-shang’ for an Example

Yuewu Chen* Yujie Wang**

Abstract

Grammaticalization is defined as the development from lexical to grammatical forms and from grammatical to even more grammatical forms. Composite words like ‘V-ageru’ in Japanese and ‘V-shang’ in Chinese are similar in their composition and meaning. Owing to their high frequency in these two languages, they have a high degree of grammaticalization. While, what are their differences in grammaticalization? Therefore, in order to solve this problem, in this paper, the author tries to set up a standard of comparative in grammaticalization so as to compare their differences in expressive function and grammatic function between Japanese and Chinese.

キーワード：V-上げる、V-上、文法化、文法的機能、表現的機能

文法化（Grammaticalization または Grammaticization）とは「語彙的な要素が特定の用法において文法的な要素になったり、文法的な要素がより文法的になったりするという、言語変化の一種である。」¹という。簡単に言えば、文法化とは、実在の意味を持つ語（内容語）から無意味または文法機能を果たす語（機能語）へと転換する現象である。複合動詞の文法化はとりわけ日本語の「上げる」と中国語の「上」が挙げられる。日本語の「上げる」と中国語の「上」²は動詞に付けられ、新しい複合動詞になり、生産性が強いと明らかに検証された。南場尚子（1991）によれば「V-上げる」の複合動詞は計 129 個で後項のみに位置する動詞順位表第 11 位を占め、『現代漢語頻率詞典』によれば常用動詞 984 個の中で「上」と結び付くことができる動詞が 456 個を突破するという。文法化の九つ原則における「頻度原則」—「実詞の文法化がそれなりの使用頻度に関わる。頻度が高いほど、文法化の度合いがより深くなる。」³により、動詞に付く「上げる」と「上」は文法化度合いがかなり深いと推測できる。しかし、同じく文法化度合いの深い両者に後項文法化において一体どんな違いを見せるのだろうか。これを詳しく解明するのが本稿の目的である。

*中国、中南大学外国語学院 **中国、中南大学外国語学院

本稿では『逆引き広辞苑』、『漢語大詞典』、『漢語大字典』を参考資料とする。まず『広辞苑』における「V-上げる」をそのまま抽出する。それから「V-上」は『漢語大詞典』と『漢語大字典』に載っている場合にはそのまま取り上げ、載っていない場合には二つの辞典における動詞を抽出し、筆者の言語感覚に照らして取るかどうかを判断する。最後にそれに基づいて、文法的・表現的機能の面から両者後項文法化の相違点を考察してみたい。

1 文法化の基準

比較する前に本稿で扱った文法化の基準を明らかにする必要があると思う。日野(2001)によると、文法化は「抽象化、抽出化、意味の希薄化」⁴と分けられる。意味の希薄化は抽象化と抽出化に比べて、文法化がより進んだ段階だと考えられる。文法化は段階的な変化を見せるので、本稿で扱った文法化は文法化がより進んだ段階であり、意味の希薄化に相当する。日野によると、意味の希薄化が指示的機能を失い、文法的・表現的機能を持つようになるプロセスである。文法的機能は談話的機能、補助動詞としての機能、接頭辞、アスペクトなどがあり、表現的機能は何かの心理的活動に傾き、批判、感謝、謙譲など心理的活動を表すことである。本稿はそれに基づいて日本語の「V-上げる」と中国語の「V-上」における後項文法化についてそれぞれの相違点を考察する。

2 「V-上げる」後項文法化

2.1 文法的機能—「終了」というアスペクト

織り上げる	書き上げる	刈り上げる	切り上げる	組み上げる	捏ね上げる
仕上げる	仕立て上げる	育て上げる	染め上げる	叩き上げる	畳み上げる
磨き上げる	読み上げる	結びあげる	調べ上げる	勤め上げる…	

(1) その年の六月に卒業する筈の私は、是非共この論文を成規通り四月一杯に書き上げてしまわなければならなかった。
(夏名漱石『心』)

(2) 母は港町で芸者を勤め上げた後も、踊の師匠としてそこにとどまっていたが、…
(川端康成『雪国』)

例文の「書き上げる」と「勤め上げる」は動作の終了を表す。寺村(1984)は複合動詞後項のアスペクトに「開始、継続、終了」という三つの時間的相があると指摘した。『広辞苑』から抽出された「V-上げる」複合動詞 91 個のうち、「終了」の意味を持つ動詞が 25 個に達することによって、「V-あげる」複合動詞が主に「終了」というアスペクトを表すとわかる。姫野(1999)は「この類は、人間の作業活動の終了に伴う『出来上がり品』が予想されるが、あるいは動作の完了そのものに重点が置かれるかによって二つに分けられる」⁵と指摘した。

2.2 表現的機能

2.2.1 強意の意味添加

おだて上げる	褒め上げる	怒鳴り上げる	縛り上げる	締め上げる
絞り上げる	ひねり上げる	つねり上げる	しごき上げる	…

(3) 布にしろ糸にしろ、夜通し灰汁に浸しておいたのを翌朝幾度も水で洗っては絞り

上げて晒す。

(川端康成『雪国』)

- (4) 友人が来て、いきなり、このオジサンに締め上げられたのでは、たまらないと思い、「いや、ボクが早く来すぎたんです」と、慌てて弁解した。(乙武洋匡『五体不満足』)

以上の「V-上げる」は具体的な動作を指すのではなく、「すっかり、徹底的に、大いに、強く、十分に」等の副詞と共に起し、前項の動作を強める機能を果たしている。

2.2.2 謙譲の意味添加

祈り上げる 差し上げる 頼みあげる 存じ上げる 願い上げる 申し上げる 召し上げる…

- (5) いま、わたくしの申し上げたこと、お気に触ったんでしょう。

(井上靖『あした来る人』)

- (6) 俺はもうねえんだ。班長に召し上げられたんでね。どうだろう、もう少し分けてくんねえか。
(大岡昇平『野火』)

この「祈り上げる」、「頼みあげる」、「存じ上げる」などのもとの動詞「祈る」、「頼む」、「存ずる」より「話し手が他に対して卑下謙譲の態度を取る。へりくだる」という意味を含めている。

2.2.3 プラスイメージ添加

歌いあげる 描き上げる…

- (7) それがインド洋をよこぎりマカオへも渡ったカモインスが歌いあげたルシタニア讃歌『ルジーアグス』なのである。
(平川裕弘『マッテオ・リッチ伝』)

この類は姫野によって「V-上げる」の「その他」に分類された。姫野は『『人生の感情を、叙情の世界を、愛の心を』を「甘美に、詩情深く、切々と、朗々と」『歌いあげる、描き上げる』のように創作や芸術活動に関して用いられた文学的表現で、『上げる』は『讃える』のニュアンスを持っている」⁶と説明した。即ち前項にプラスイメージの意味添加という表現的機能を果たしていると考えられる。

3 「V-上」後項の文法化

3.1 文法的機能

3.1.1 「終了」というアспект表現

关上 挂上 拉上 系上 连上 接上 捆上 锁上 覆上 盖上 敷上 蒙上 罩上 压上 填上 抹上 戴上 献上 写上 画上 铺上 涂上 缀上 溅上 种上 插上 赶上 遇上 碰上 撞上 考上 当上 闭上 看上 娶上…

- (8) 娃娃们都闭上嘴，屏住呼吸。/子どもたちは口を閉じて息を殺した。

(史铁生『插队的故事』)

- (9) 最多三天，咱就能把地种上。/三日もあれば韋えるな。

(浩然『金光大道』)

「上」はもともと「低いところから高いところへ移動する」⁷を指すが、ここでの「V-上」における「上」は「下から上へ」という空間移動を表さず、動作の終了という意味

になる。龚千炎(1991)は中国語動詞のアスペクトを「完了・実現相、経験相、近い経験、進行相、持続相、開始相、継続相、将然相、即行相」に分けた。「完了・実現相」はすなわち「終了相」のことであろう。「閉上」は日本語で訳せば「閉じた」の意味になる。「種上」は「種を蒔いた」に相当する。しかし、ここでの「V-上」は単なる「終了相」を表すだけではない。『漢語大字典』には「上」について「動詞の後に付き、動作の終了または動作の結果を表す」⁸という解釈がある。潘海峰は(2005)「これは主体動作の完全によって出た結果である。動作の終了だけでなく、その後出た結果がとりわけ注目に値する」⁹と指摘した。たとえば「閉上」は「目を閉じて、その閉じた状態を維持する」と意味する。

3.1.2 「開始」というアスペクト添加

領上 喝上 浇上 骂上 嚷上 干上 好上 …

(10) 他们刚喝上酒，你到西屋等一会儿吧。/あの人たちはいまお酒を飲み始めちゃったんだよ。こっちでちょっと待ってておくれ。(浩然『金光大道』)

(11) 拉着铺盖刚一出街门，他听见院里破口骂上了。/蒲団を車につんで門をでたとたん、中庭で金切り声が爆発した。(老舍『骆驼祥子』)

例文10の「喝上」は「飲み始めて、飲みづつける」の意味である。例文11の「骂上」は「罵り始めて、罵り続ける」に相当する。梁銀峰は(2007)『漢語趨向動詞文法化』に「上」について開始を表す機能を含めると説明した。『實用現代漢語文法』には「上」の意味拡張について動作の開始とその持続を表すと解釈した。または潘海峰も『V-上』は新たな状態になる。つまり動作あるいは状態の開始を表すことである¹⁰と指摘した。以上をまとめると、「V-上」は「開始」というアスペクトだけでなく、その動作の継続も表すということがわかる。

3.2 表現的機能—プラスイメージの意味添加

玩上 买上 醉上 吃上…

(12) 停了工，歇了活，痛痛快快地玩上几天。/仕事をやめ、骨休みをして数日を思いきり楽しむことにした。(浩然『金光大道』)

(13) 他买上一股截烤白薯，一边就着冷风吃一边吃…/焼芋を一本買い、寒風の吹きさらす中をかじりながら歩き…(王蒙『活动变人形』)

以上の「V-上」も、「下から上へ移動する」ということを表すのではない。例文の「玩上」「买上」は「玩」と「买」に等しい。つまり「上」がなくても文の意味もあまり変わらない。しかし、「上」を添えることによってユーモラス、諧謔な語感を添加するようになる。蒋华(2003)は「跑上几圈」が「跑它几圈」に変えられるのを認め、「它」と同じく、『上』はニュアンスを表す漢字で、気楽にするというニュアンスを含めている¹¹と分析した。つまり前項に「気楽にする」というプラスイメージの意味を添加することであろう。常に口語に用いられる。

4 まとめ

本稿は日野に定められた文法化の基準—意味の希薄化に従い、日本語の「V-上げる」と中国語の「V-上」における後項文法化の相違点を検証した。本稿の考察によって両者

の相違点は次のように表することができる。

表1 後項文法化の相違点

	文法的機能	表現的機能
「V-上げる」	「終了」というアスペクト	強意の意味添加 謙譲の意味添加 プラスイメージの意味添加
「V-上」	「終了」というアスペクト 「開始」というアスペクト	プラスイメージの意味添加

しかし、本文でまだまだ未解明の事柄も多い。例えば中国語において「V-上」は「プラスイメージの意味を添加する」を表す場合、時に音便化することもある。たとえば「上」はもともと第四声であるが「玩上」においてよく軽音になる傾向を見せる。この問題点を解明するためには、一層詳細な事例研究が今後の課題として残されている。

注

- ¹ 舛山洋介・深田智(2003)「多義性」、松本曜編『認知意味論』 大修館書店 p.121
- ² 本稿は動詞の「上」を研究対象とする。中国語の動補構造が日本語の複合動詞と見られる。動補構造の一種とされた「V-上」も複合動詞の範疇に入れられると思う。
- ³ 呉福祥(2005)『現代漢語副詞研究』 商務印刷館出版社 p.8
- ⁴ 日野(2003)によれば、「抽象化において、意味は具体から抽象へと変化し、具体的な意味がなくなる代わりに抽象の意味が現れる。抽出化においては、もともとの意味の一部が失われる。意味の希薄化においては、もともとの意味が失われる」という。九州大学出版社 p.1
- ⁵ 姫野昌子(1991)『複合動詞の用法と意味構造』 ひつじ書房 p.49
- ⁶ 姫野昌子(1991)『複合動詞の用法と意味構造』 ひつじ書房 pp.51-52
- ⁷ 劉月華(2001)『実用漢語語法』 商務印刷館出版社 p.546
- ⁸ 漢語大字典編纂委員会(1990)『漢語大字典』 湖北辞書出版社・四川辞書出版社 p.5
- ⁹ 潘海峰(2005)「動詞『上』的語法化過程和『V-上』結構的句法語意問題研究」上海師範大学 p.26
- ¹⁰ 潘海峰(2005)「動詞『上』的語法化過程和『V-上』結構的句法語意問題研究」上海師範大学 p.32
- ¹¹ 蔣華(2003)「趨向動詞『上』語法化初探」東方論壇 5期 p.47

例文出典

中日対訳コーパス（第一版）（2003） 北京日本学研究中心

参考文献

- 1 梁 銀峰 (2007) 『漢語趨向動詞的語法化』 学林出版社
- 2 劉 月華 (2001) 『実用漢語語法』 商務印刷館出版社

- 3 日野資成 (2003) 『形式語の研究—文法化の理論と応用』 九州大学出版社
- 4 姫野昌子 (1991) 『複合動詞の構造と意味用法』 ひつじ書房
- 5 松 本耀 (1998) 『認知意味論』 大修館書店
- 6 南場尚子 (1991) 「複合動詞後項の位置づけ」 同志社国文学 34 号
- 7 潘 海峰 (2005) 「動詞『上』的語法化過程和『V-上』結構的句法語意問題研究」 上海師範大学
- 8 蔣 華 (2003) 「趨向動詞『上』語法化初探」 東方論壇 5 期
- 9 于康・張勤 (2000) 『中国語言語学情報 2—テンスとアスペクト』 好文出版
- 10 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 くろしお出版
- 11 楊 榮祥 (2005) 『現代漢語副詞研究』 商務印刷館出版社
- 12 楊 晓敏 (2009) 「日语複合動詞的多義性研究」 上海外国語大学
- 13 王 濤等 (2002) 『漢語大詞典』 電子版 商務印書(香港)有限公司
- 14 呉 福祥 (2005) 『現代漢語副詞研究』 商務印刷館出版社
- 15 漢語大字典編纂委員会 (1990) 『漢語大字典』 湖北辞書出版社・四川辞書出版社
- 16 北京語言学院語言教学研究所 (1985) 『現代漢語頻率詞典』 北京語言学院出版社
- 17 岩波書店辞典編集部 (1999) 『逆引き広辞苑』 岩波書店

(平成 23 年 3 月 31 日受理)